

歌集

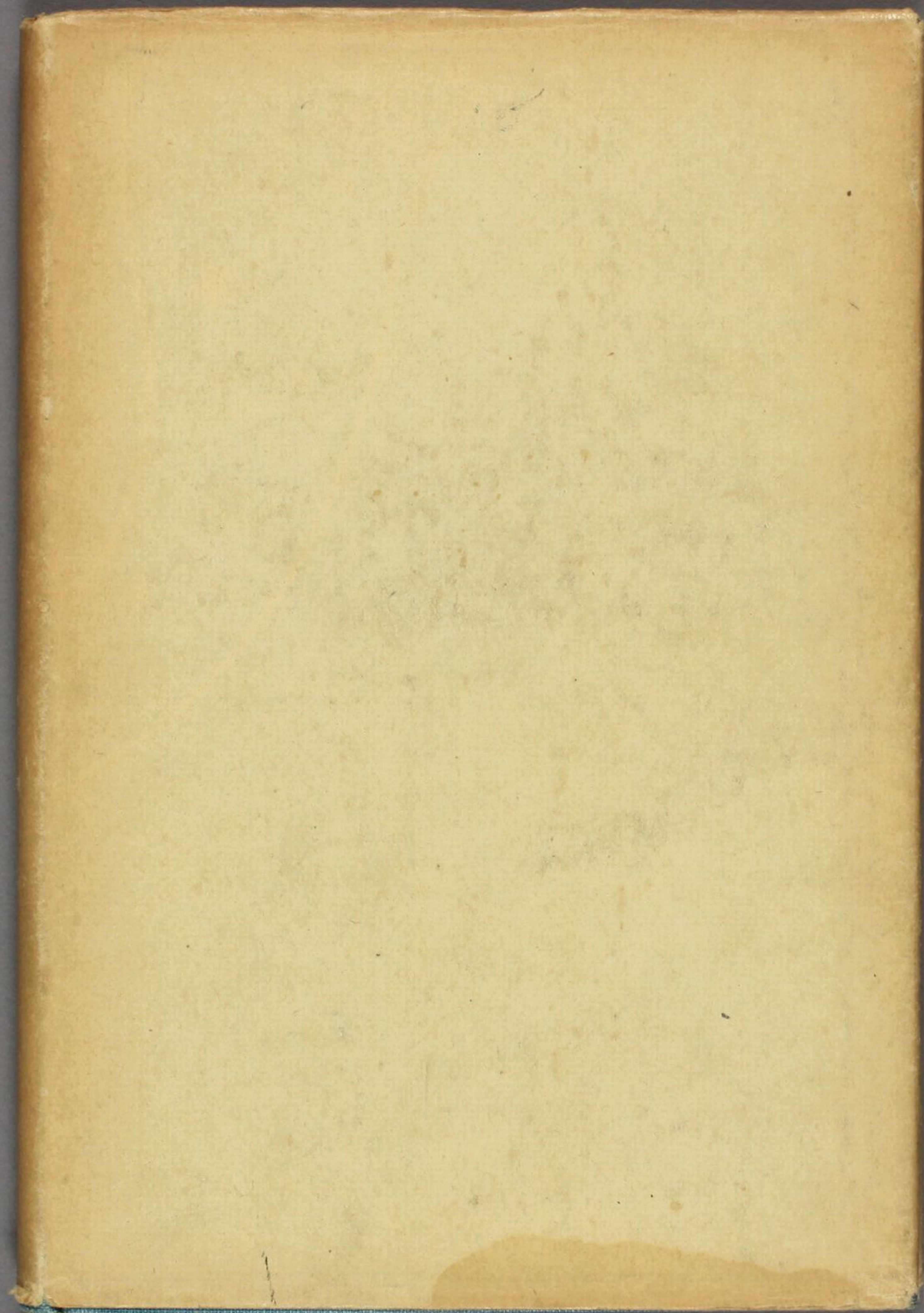
佐々木信綱著

おし草

東京博文館



全
佐々木信綱著



歌集
おし草

佐々木信綱著

東京博文館



佐々木信綱著

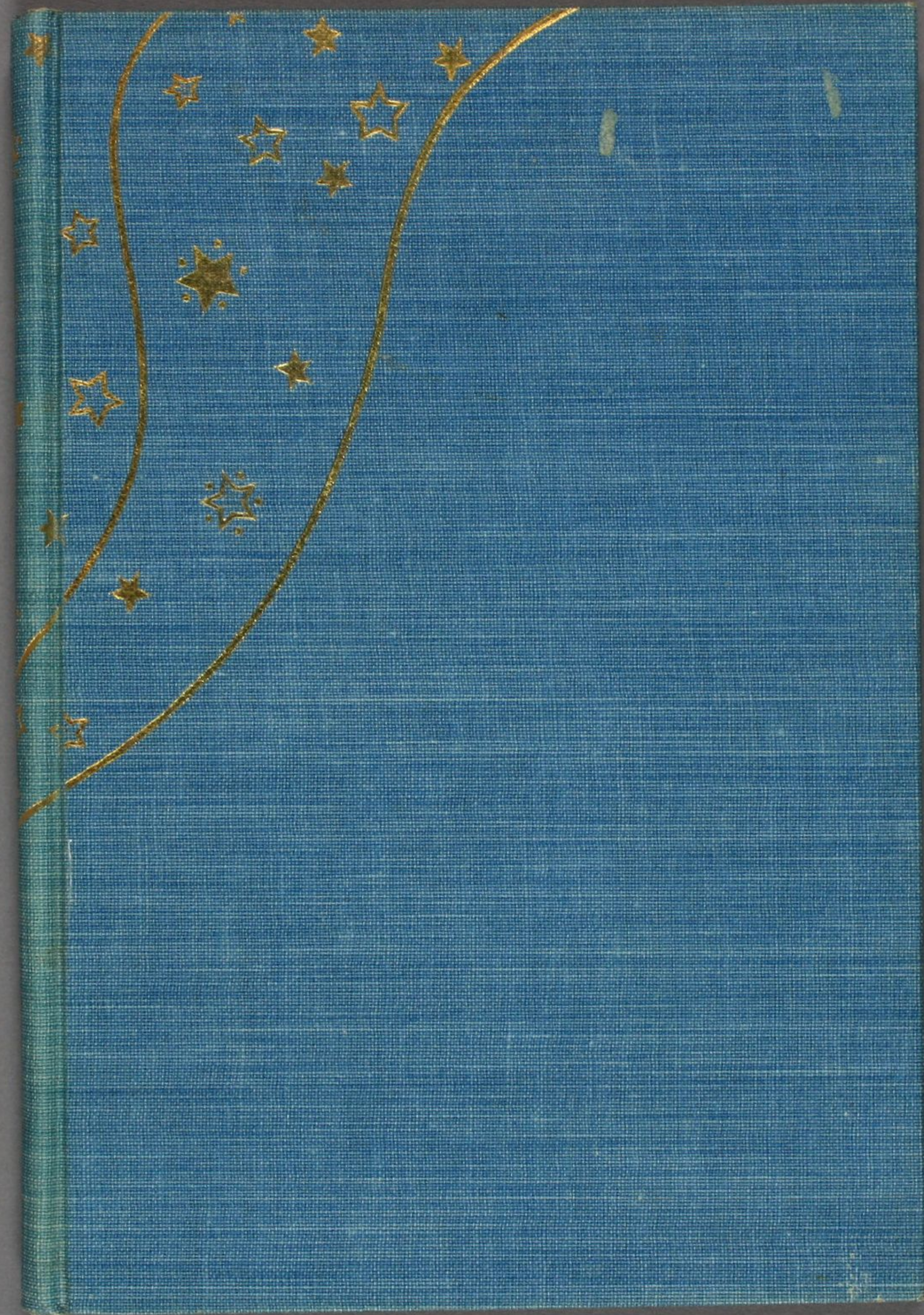


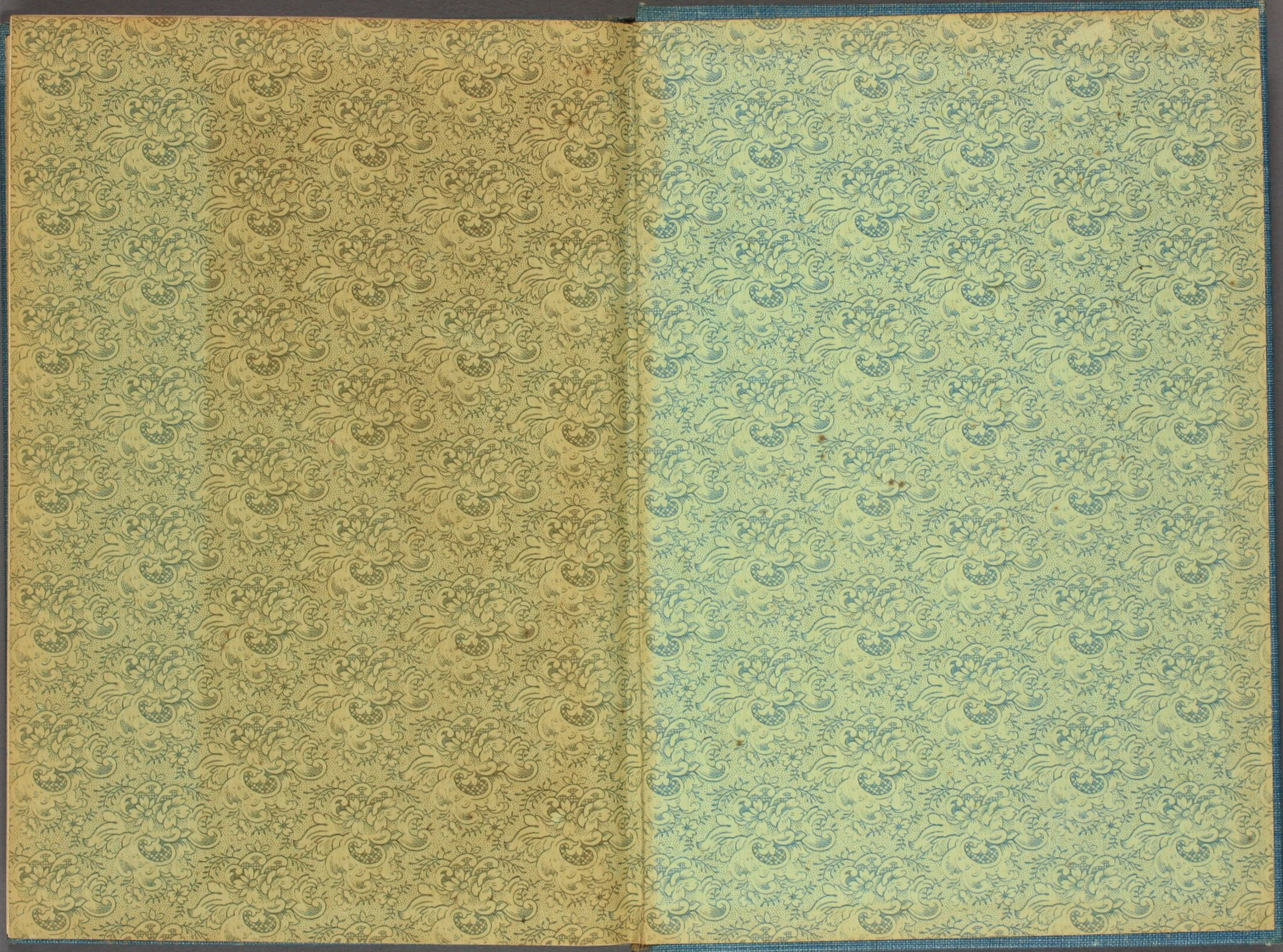


思草

W







佐々木信綱著

和子草

博文館

佐々木信綱著

おとこ草

博文館

思草序

創業與守成何難。余以爲創業似難實易。守成似易實難。何也。蓋鼓勇奮智。賭輸贏於一戰。作氣張膽。決勝負於片時。成則帝王將相。敗則降虜碎屍。無辱祖先之慮。無累父兄之憂。事或以僥倖成。功或以詭變立。是創業之所以似難實易也。若夫守成則不然。負社稷之重。任衆庶之責。欲除宿弊。動多妨碍。欲建新制。輒遭齟齬。若非確乎不動卓然自守。不能守前人之遺業。以固後世之基礎。是守成之所以似易實難也。嗚呼。是豈王業霸圖而已哉。凡文藝伎術。莫不皆然矣。友人佐々木君信綱。伊勢人。父曰弘綱君。修國

二
典。研究歌學。事足代弘訓翁。爲高足弟子。信綱君。初從父來東京。入大學古典科。受國史國文。兼修家學。最善國風。父歿。欲承其志。以國風成家。不肯出仕。當是時。歌道大衰。拘泥格調。不能脫古人範圍。陳腐自珍。君別創一派。不拘舊格。着意斬新。凡人間所有萬物。莫不入歌詠焉。同時有唱新派者。或專用古語。奇僻自喜。或盡破舊格。翻弄新異。君獨毅然守其所信。不少屈。遂以此著名。可謂不失前人之遺業。以固後世之基礎也。聞君先子好遊。君幼從之。漫遊四方。山川草木鳥獸。古賢遺跡。受其指導。及後移東京。暇則出遊。每有吟詠。積爲冊。又採拾古人歌集。校訂誤謬。

以授梓。他所著。率皆關歌道者。數十卷。並行於世。先子號曰竹柏園。記其堅貞也。君乃創竹柏會。來參者數百人。頗多俊秀。因集其所作。曰竹柏園集。承繼先志。其篤信如此。頃者君自選平生所得。短什數百首。名曰思草。將相續。以及諸體。求序於余。余與先人爲隣。常相來往。實兩世親交。義不可辭。乃述守成之難。以勗之。古語云。讀萬卷書。行千里路。可以爲名士。君家多藏書。亦好跋涉山河。若勉焉不已。吾知其所造詣。不止今日之所得也。並書以爲序。

明治癸卯八月

東京 依田百川 撰

おもひ艸の序

抒情詩は近き世西の國國にては只いと狭き好事の人達の間にもてはやさるるものとなりぬとか。本と此體の詩は人の性情より出づる詠歎の聲にしあれば彼國人といへどもいかでか折に觸れて歌ひ出づる言の葉なかるべき。彼國の諺に世にあれ出でたるものは皆一たび詩句を作る齡をふといへるはた此意とこそ聞ゆれ。さるを抒情詩の行はるる境界何しかも斯くは狭まりぬらむ。思ふに近き世の文明の向ふところ古にかはりたるより形式のおきてといふ

ものいつしか弛び廢れにしやそのいちじるき
原因の一つなるべき。我國の三十一言の歌は上
れる世よりその形式變ることなく世世の先達
のもとにはもはら藝術もて世に立たんとする
人はさらなりただ折折のすさびなる傍業とし
て藝術をもてあそぶ人達さへ打雜りてぞ寄り
集ふ習なる。かかる習は音樂繪畫などの上にこ
そ餘所の國國にもありといへ詩の上にはいか
でか其ためしあらむ。されば我國は西の國國と
殊にて遠き昔より詩と社會との連繫とはに絶
ゆることなかりき。これを思へば我國の詩人た

らむ事そもそも幸あらずやは。さて此形式のう
ちにをさむる詩のころはいかに。ここにその
移り變りし跡をたづぬれば世々の文明の消長
と共に或ときは榮え或ときは衰ふるさま譬へ
ばおほ海の潮干潮満ち絶ゆることなきが如し。
ましてや近き世となりて夜晝時を異にすなる
西のはてなる國國よりめづらしき思潮かはる
がはる來寄るまにまに政治宗教風俗習慣こと
ごとく改まり行きて勞作交通のいろより
おきふしの末までもその事ごとにつけて人の
心におもふらむ事おのづから變り行きぬれば

抒情詩はたいかでか獨りもとのままなることを得む。今や西の國の諺に新なる葡萄酒を古き袋に盛ると云ひけむ如くかの昔ながらの三十一言の形式にあらたなる性命を嘘き入れつべき時こそは來ぬれ。近き比さはに出で來なる詩人等のころざすところ一つとして然ならぬやはある。その集どもを讀み見るに例の新體詩といふものと擬古の長歌とをば去ばらくれきおほかた三十一言の舊き形式に従ふものから其間猶人ごとと同じからぬ趣ありて譬へば百鳥の競ひ鳴きてその音譜とりどりになつかし

く千草の花の亂れ咲きてその色調おのかじし珍らしきが如くなるは兎にも角にも頼もしき現象とこそいふべかめれ。もとより世世にあらたまるものは詩の意にしてとはにとどまるものはその形式にはあなれどもその變るが中に根ざし深き性情と共に長くとどまる眞ごころあること譬へば瀬の淵とならむ後巖は猶水底に立てらむ如くなるべくそのとどまるが中に抑揚弛張の變化より未曾有の新なる志らべ出で來ること譬へばおい人のくしき泉を浴みて再び若ゆらむ如くにぞあるべき。そもそもかぐ

ろき髪黄なる膚はとどまれる形式ながら今の世にある人ごとにつきて面の筋肉のはたらき肢體のふるまひを見てもゆけば進化の迹あり退化の志るしあり又蠻勇のかたくなにして舊きになづめるあり高襟の軽く浮きて新ならんことを競へるありてれのがじしなる表現の數よみ盡すべくもあらずかの三十一言の形式に今むかし相異なる詩のころををさめ入れて礙ぐる事なきはたなどかこれに殊なるべき。これを思へば詩の形式はまことに驚くべき弾力性を具ふる物とやいふべき。あはれ佐々木ぬし

の此一巻よ。詩のころに従ふ表現の數多くしてこれに應ふる形式の弾力性大いなること世に詩集はさはにあれどもこれに上こすものまた有りぬべしやは。かれ此巻一たび世に出でば作者と魂あへらむ人はけだしその普遍無碍の天才をしもたたへなむか。又嗜むところ同じからぬ人はかへりてそれを個人性少き折衷家などとやれとしめいふらむ。稱へむ人は稱へよかし。貶めむ人は貶むとも好し。そはとまれかくまれわれ等同世の人と生れてはかかる一時の毀譽にほださるることなく猶二集三集つぎつぎに

出でむを待ちて作者のまことにこころざすら
む方をもきはめただしかの三十一言の外なる
形式どものいかさまに使はれむをもわきまへ
知りてさて千萬代まで易るべからぬ科さだめ
いかにとまづかに思ひはかるべきにはあらじ
か

明治三十六年十月

源 高 港

佐佐木君歌集題詞

讀萬卷書行萬里養胸中氣而已矣巍其如山浩如
水雅音洋洋合宮徵感動神鬼參經史君歌豈啻彫
蟲技三十一言千萬旨惟情一字爲本始

山高月小過黃州黃鶴縹緲餘飛樓三閭祠荒天易
秋森森洞庭湖上舟八九雲夢吞不休歸時一卷驚
同儔畫到有聲清更適臥我讀之猶伴遊君將遊清國

寧齋主人 拜稿

おとひ草

佐々木信綱著

鳥の聲水のひゞきに夜はあけて神代に似たり
山中の村

霧こめて雁がね寒し君とわが別れし夜半に似
たる夜半かな

劍を負うて落魄こゝに二十年わが髪白し秋の
ゆふ風

風にゆらぐ凌霄花ゆらくと花ちる門に庭鳥
あそぶ

一年の終の夜半を尼寺の讀經の聲のまづかな
るかな

後の世もこの世に似たる世なりせば君とかた
らむ花かげにして

2

天地のかくろへごとをわが胸にさゝやく如き
水の音かな

3

變り行く昨日の我身今日のわれいづれまこと
の我にかあるらむ

地の底三千尺の底にありて片時やめぬつるは
しの音

ことごとし何の冠何の衣猿はもとのましらな
らずや

そゞろにも故郷いづる夏のよひ星かげまばら
草の香高き

年毎にせばめられゆくあいぬ村むらの垣根の
えぞ菊の花

死を期する鐵騎三百江に沿うて南に急ぐ木が
らしの風

酔ひくゞてゑひ泣するを許せ君ますらをいか
で涙なからむ

竹やぶのいづこも同じ垣根道いづれなりけむ
伯母君の家

雪室に酒をひやして室守が昔の戀をかたる夜
半かな

老の手になほとりあぐる舞扇むすべる糸も色
あせにけり

石多き湯の山越の七まがり湯のけ薫りて百合
の花咲く

觀來れば山もなくまた水もなしむなしき空は
たゞ秋の風

朧夜のかげに消えゆく君のかげ我身このまゝ
きえよとぞ思ふ

青雲を踏みております神の手にとりもたした
る白百合の花

今はとて棺の蓋にうつ釘の音わが胸にしみと
ほるかな

運び來し炭いく俵酒にかへてよるめきかへる
山の柴人

世にあはぬ調をひとり去らぶべし人の門には
いかでたつべき

いさゝかの物うる家の花瓶に咲きこぼれたり
櫻山吹

軽く飛ぶ兎の外に音もなし嫦娥の宮の春ふか
くして

天地のかゝるけしきにいだかれてかくて靜に
ねぶりてしがな

翅やれて飛ぶ蝶かなし人志れず今日もまうづ
る奥つきのもと

昔がたりいまだつきせずさしそふる楳火に赤
し山守の顔

小笹原露ほろく〜とこぼれおちて二十五菩薩
秋の雨ふる

いさゝかのよき事なして一つきの酒心地よき
此ゆふべかな

簞の上に蜻蛉とまりてあら川の浮間のわたし
人かげもなし

利のやつこ位のやつこ多き世に我は我身のあ
るじなりけり

木がくれに鶯なきて春ふかき關の古道あふ人
もなし

春來ても日あたり疎き山寺の墓原つゞき梅の
はな咲く

岩かげのくらくつめたき夕風にひとりかをれ
る蘭あらいざの花

願はくはわれ春風に身をなして憂ある人の門
をとほゞや

水車ねぶりをさそふ音きゝて木かげにいこふ
老し旅人

白駒にしづ鞍おきて春の夜を神おりたゝす松
がうら島

そしる人仇なす人も憎からず袂にかろし春の
朝風

大方は昔なじみの顔ならず村の居酒屋むかし
ながらに

いかにせむ聲志る人もなき國にうづもれはて
むわが緒琴はや

木戸しめて又たどりゆく牧場道春日うらゝに
駒むれ遊ぶ

今はさは我もかこたじほゝゑみて別れむ今日
を思ひ出にせむ

罪もなき妻を叱りてたちいづる門の秋風そゞ
ろつめたき

道説くと西に南に錫杖のかげもやせたりわが
たび姿

婆娑として天をおほへる椰子の木の木かげ涼
しき眞清水の音

いたづらに出湯あふれて秋ふかき山の上の宿
人影もなし

粟畑の粟の穂低くうなだれて小雨さびしき畑
の中道

後の世の千年何せむ今の世に君と語らむ一時
もがな

浪きよき濱べに別れ君に別れひとりか行かむ
霧深き朝を

君北にわれひむがしに君も我も志成らで今日
や別れむ

村の子を教へくくて古びたる机のもとに身は
老にけり

たつ人はみな立ちはてゝ旅籠屋のひる間さび
しき庭鳥の聲

いかならむ野わけ山わけ求めゆかば我思ふ人
と住む里のあらむ

立ちとまりかへり見すれば君とわが唯二すぢ
の眞砂路の跡

小さなる望をすてゝむしろわれ此島守になら
むとぞ思ふ

見そなはせみ空の星の清きごと清き我おもひ
君に誓はむ

耳志ひし世人に何を語らはむ天を仰ぎて唯笑
はゞや

鍛冶われわが血わが靈うちこめてうちきたひ
たる國守る太刀

にぎり酒手づからくめどうまからず人いなせ
たる宿のさびしき

庭つ鳥なやのうしろに聲たて、梭欄の葉うご
く片われの月

道づれの旅商人もわかれけりもずがね寒き山
かげにして

大木曾やをぎその山の山おろしに千年の老木
空に聲あり

ますくなるひとすぢ道のつれづれに折りては
すつる秋草の花

わたし待つ翁姫の物がたりかゝる所もうき世
なりけり

人の世の榮え衰へよそにして浪は千歳のひゞ
きなりけり

さびしさに池のあひるに餌をやりて空を眺む
る夕まぐれかな

一つくおもひ出多き垣根道昔ながらに桃の
花咲く

琵琶法師暇申してまかんづるおばしまさむき
さよ時雨かな

いたづらに人たゞ老てこの春も花さきにほひ
花亂れちる

うたげはてゝ花の燈火皆きえてをぐらき庭の
こほろぎの聲

糸車ひく手とゞめて家出せし我子の上を又お
もふかな

人の世の人のことばに限ありてわが此おもひ
いひ出がたき

柴おひて家路にかへる翁ひとり入江志づかに
物音もなし

古寺の大木のいてふ亂れちりて鳩みだれ飛ぶ
木枯の風

君がゑみしかの日かの時大宮の花の木かげの
今も見ゆるかな

末きゆるちぎれくゝの物おもひいつしか夢の
うちに入りけむ

同じくは花散る淵に身を投げむ君たゞずみて
あはれとや見む

身一つを神にさゝげて今日の今宵初めて安き
わが心かな

此磯のこの岩のうへに誰か又今日のわがごと
泣く人のあらむ

夏さむき淺間が嶽の麓原雲低くおりて飛ぶ鳥
もなし

家のあるじ都にいでて程なきに杉山檜山賣る
といふなり

里の子の道ゆきぶりに倒されて倒れしまゝの
石佛かな

汝が爲にまぐさとゝのへわが爲に夕けたきて
あらむ急げ我駒

天つ日もさゝぬひとやの壁ぎはに秋は秋なる
こほろぎの聲

今日もくれぬまち喜びし人はうせてさびしき
家に又や歸らむ

まばらくは忘れし罪をとりいでてせむるに似
たる月の影かな

加茂川の川そひ柳露おちて雨にうつくし傘かさの
うちの人

さびしさの慰さむやとて奥つきに植しうばら
の花さきにけり

破れたる我胸今はいかゞせむ君の情をおそく
知りつる

あま寺の若き尼ぎみ閑伽くむと行く道ほそし
秋萩の花

さかしげに昨日は人をなぐさめつ今日の憂を
われいかにせむ

燃え盡きし山の頂に一人たちてつらかりし人
を猶思ふかな

けふならで又いつの時君と二人君とたゞ二人
語る時のあらむ

天つ神天にましますいつまでか君が心のやす
けかるべき

そゞろありきそゞろ楽しき夕べなりや行くに
友あり野邊に花あり

橋ぎはの小家の燈火またゝきて行く道くらし
木枯の風

後の世を共にいのりし長谷寺の入相のひゞき
ひとり聽くらむ

よしや君いづちゆくともわればかり君思ふ人
はあらじとぞ思ふ

はかなくて別れし君がゑがきつるかの畫に似
たる雲の色かな

共に見し沖の島への磯馴松あき風いかに寒く
吹くらむ

塔をそめし夕日志づみて墓原のあたり志づけ
きこほろぎの聲

人は世はわが此罪を忘るべし胸の苦しびわれ
いかにせむ

星ゑめり千草匂へり天地に二人のおもひ満ち
にたらずや

歸りくる與作が馬のいなゝきに夕日かたぶく
坂のした道

新墾^{にいげん}の野末^ののむらの若葉^{わかば}かげ低く小さき鯉^{こい}の
ぼりかな

闇のうちに我を残して廣き野の野末はるく
日は暮にけり

打けぶり軒端も見えぬ蚊遣火の中にこもれる
わらひ聲かな

手折てはやがてすてます萩が花この花に似む
我身なるらむ

白雲は峯をつゝみて鶯のこゑより外の聲な
かりけり

山かげにつゞく竹村桑ばたけわがふるさとに
似たる道かな

行燈にかきすさびたるざれがきを臥しながら
よむ雨の夜半かな

罪あるも罪なかりしも皆消えて残るは苔の緑
なりけり

つとめをへて此世にいづる坑夫らがつく息く
ろし雨の夕暮

人皆の心つめたき世なりともつめたき心もた
じとぞ思ふ

今更に情がましき言葉こそ恨の上のうらみな
りけれ

馬市によき馬かひてかへるさの野路おもしろ
き鈴蟲の聲

よしや君つれなしとてもわれ一人思ふをのみ
は君もとがめじ

罪なくて世を去りし人の世にあらば安けかり
けむ寂しかりけむ

かや山の夕日なゝめに影おちてほじろ山がら
空にむれたつ

君とわれいづれのこりて跡とはむはかなきも
のは此世なりけり

なげうてば石にも聲はある物をなす事なくて
はてむ我身か

いつの世の誰が胸よりかあふれけむ調かなし
きひな唄の聲

波白く松青きところこゝも又とつ國人の家や
たつべき

物いはで神につかふる北の海の友なつかしき
秋の夜の雨

泪なく血なき世人にまじらひていつまで我は
笑ひつゝあらむ

もろ共に同じ越路をいでしかどわかれくに
糸とりくらす

鵜かごおきて水を眺むる鵜つかひの踏みしだ
きたる撫子の花

草深き父の御墓にぬかづきて昔の罪をひとり
泣くかな

破れたる傘からかささして子等ぞゆく古き驛の雨のゆ
ふぐれ

道のべの花の一枝折りとりてそゞろにおもふ
ふるさとの人

わが外にとまる人なき旅籠屋の行燈のもとに
山家集をよむ

ゆくらくゝ眠催ほす馬の上に見えては消ゆる
古さとの庭

秋さむき峯の大寺日は斜寂寞として物おとも
なし

嫁入のためにと植し桐老いて子へはかなくも
なりにけるかな

山百合の幾千の花を折りあつめあつめし中に
一夜寝てしが

はねつるべゆるく響きて安らかに静けき村の
夜は明にけり

順禮の親子のすがた山に入りて青葉がくれの
補陀落の聲

志らかしの若葉にこもる村はづれ家居は見え
ず箴の音聞ゆ

旅籠屋の屋の上の草はな咲きて古き驛路あふ
人もなし

志とくと露志たゞりてほの暗き岩屋の奥に
かはほりの飛ぶ

畫筆とりて旅に三年の秋もくれぬ思ひ出多き
木曾の山里

うつくしき妻あり我に光よき鋏あり我に樂し
人の世

片すみにおしよせられし墓石のくづれし中に
こほろぎの鳴く

牡丹さく春のあしたをめされたる楊家のむす
め宮にまうのぼる

野の末にわが家見えて霜がれの夕べさびしき
道の一すぢ

山かげの花の下ぶし目さむれば夢路につゞく
鶯の聲

戦に召されし我子歸りこで今年の秋もたでの
花ちる

さむき夜を辻占賣が提灯の光きえゆく町はづ
れかな

とこやみの闇の底より何ならむ我を呼ぶらむ
聲の聞ゆる

なつかしき昔の橋のもとにくれど昔のかげを
見るよしのなき

世中のせむすべをなみ新妻いひづまのうつくしづまに
荷車おさす

日數へし船の友だち雨にぬれてわかれくに
なる湊かな

燃えたてる炎の烟その中にまぎれ入るべきわ
が身ともがな

二度はあはんあはじめわき難き道のゆく手の
人をしぞ思ふ

ほろくと紅葉ちる岡の別れ道わかれくに
今日やなりなむ

雲に問へば雲に憂の色ふかし石に語れば黙もたし
つゝのみ

腹だたし人の憂も知らぬげに籠の鸚鵡の獨も
のがたる

けがれたる人の此身のたゞ志ばし神に近づく
夜の眠かな

ひき舟の篋笠すがたとほく消えて春雨けふる
なか川の水

大空の星の御國にあはむ目ぞ妹と呼ぶべし背
とや呼ばれむ

ありくくと見ゆる聞ゆる罪の影わが胸くるし
あはれいかにせむ

はやり唄うたひてすぐる若人の若き心になる
よしもがな

いたづらに語らずいはず一すぢの我ゆく道を
われは行かばや

乗る駒の足音に蝶ぞみだれ飛ぶ春風四月須磨
寺の道

わが影のわれを追ひくる心地して枯野の夕日
そゞろつめたき

一時の怒は消えて大空の月にすみゆく我こゝ
ろかな

七里にきこゆる緒琴ありながら弾く人なくて
緒琴くちむとす

胸に志む恨の詞いひとかむ術をし知れどいは
む由なき

旅なればなげの言葉も嬉しきをねもごろ君が
今一夜とぞいふ

はてもなく咲つゞきたる菜の花の中に家あり
神崎の里

世も人も恨めしからずつらからず唯我身こそ
かなしかりけれ

君におくる最後の書をかきをへて泣かれむ限
獨なくかな

昔見し人かあらぬか夕ぐれのさ霧にきゆるそ
のうしろ影

堯の民小田に耕しことひ牛畔にねむれり桃さ
ける里

胸にいだくうたがひいまだとけずして今年の
秋も今日くれむとす

相いだき共にやいなむらみの底そこに吾等の
安き國あらむ

夢なりき清くかなしき夢なりき問ひますな君
許しませ君

緑なる牧場をこえて森かげの友の家とふ春の
ゆふぐれ

飴賣の笛の音遠く聞え來てちまたさびしき眞
晝時かな

花の上野はなの廣小路栩栩として翩々として
紙の蝶舞ふ

姫きまさざとざしゝ窓に蔦おひて汐風さむき
海添みぞたの館

歸り來し古里をわれ去らむ哉稚兒いだく人を
見るにえたへぬ

かたすみに光うすくてまたゝける小さき星を
あはれとぞ思ふ

なげうちし幾万のこがねをしからず惜しきは
春の別なりよ君

今にして思へば悲しかの折になど真心をもら
さざりけむ

見世物の小屋のうしろの話聲ものかげくらし
朧夜の月

ほしと思ふ時のまよひに折りとりて花の命を
ちゞめつるかな

二十年の夢よりさめて見あぐれば富士の根高
し青雲の上に

かくばかり我をおもほす母にだに尙語らはず
罪深きわれ

踏みゆかば龍の宮にやいたるべき浪の上白し
白かねの道

宿引の聲まづまりて驛路の並木松かげこほろ
ぎのなく

わが園のうらの麥畑林檎畑わが春秋の安くも
あるかな

柴の戸を明けたるまゝに主人さりて花さきに
けり花ちりにけり

はてもなき天つみ空をかへる雁いづちより來
ていづち行くらむ

病める妻荷馬にのせて山奥のいで湯あみにゆ
く春の山道

明石がた松の下道朝ふめば春の志ほみちて鷗
飛びかふ

村づかさ貢をはたる聲さむし秋くれ方の山か
げの村

高麗人は内裏にまゐりて鴻臚館あした靜に牡
丹はな散る

漂ひし沖の七夜のものがたり酒つぐ妻がおも
やつれたる

堤ゆく人かげ一人また一人さぎり晴れゆく川
添の道

罪多く生れいでたる人の身のわれうらめしく
人うらめしき

我命うせむ折にと思ひしを心よわくも洩らし
つるかな

老いませる古き師の君とはむとて辿る野道の
野茨の花

許しませ報はずでにあまりありたれ故ならぬ
我胸のなやみ

酒ひえぬ友は眠れり水樓の雨の音寒きともし
火の前

拾ひたる螺鈿ちてんの小櫛くしそゞろにも主なつかしき
朧月夜や

天の下もてあそびけむ人いづらおくつき寒く
雨ふりすさぶ

天つ水磯の七村洗ひ去れど人の子いまだ罪を
悔いざる

山の上にたちて我見る夕づく日明日の夕日は
たれ眺むらむ

いたづらに心ちらさじ櫻花さかば咲かなむ散
らば散らなむ

花に舞ひし昔の姿ゆめに見てさむればわが身
埋火のもと

おくつきをおほふかしの木とこしへにさめぬ
眠を守れとぞ思ふ

風に靡く香のけぶりのいつまでか我も此世に
消のこるべき

さゞれふむ小鳥の聲も秋たけてわたらせ川の
音のさむけさ

都より花嫁來ますゆふべとて渡わた口にしぎはふ燈
火の影

とらはれし吾背はいまだかへり來ずわら屋の
軒の梅の花ちる

胸のうちの罪身を責めて怖ろしく苦しきたへ
ぬ闇の道かな

櫓をおせば光るうしほの光のみくれ残りつゝ
海は暮れにけり

春の夕日斜にさしてやはらかに草の香かをる
野邊の細道

白玉をみがきし殿もくつる時あらむ安かるべ
しや草むらの墓

今十年十年の後にかへり見よ君や正しき我や
よからぬ

君の爲いはふべき日と思へどもなどかく物の
悲しかるらむ

送りこし人と別れつ燕とぶ笛吹川の川くまに
して

五里の山路外に家なき一つ屋も二人しあらば
寂しくはあらじ

山中の一つはたご屋雨もりてねられぬ夜半の
たに川の音

白金の桂の枝をとりもたし月の宮姫きざはし
くだる

金泥のふすまに畫かく春の宵人うつくしく花
うつくしき

聲ひくしひくしあれど真心の聲天地にとほ
らざらめや

さすらひて年ふる里に歸りくれば喜ぶ乳母の
髪白くなりぬ

わが病またくは愈えず温泉の宿の歸るさ寒し
山の下道

夏の夕日松に照りつく成田道かたる眠りて日
ぐらしの鳴く

鐘の聲さ霧に消えて天地にいたり渡れる夜の
色かな

渡つうみの波路を常に往きかひて舟も老にけり
我も老にけり

昔見し少女はあらずひとむらの草の花さけり
おくつきどころ

何事を思ふとなしにゆきくゝて野邊のはてに
も成にけるかな

すゝびたるゐるりのもとの物がたり幼き孫は
早寝入りたる

みちのくの廣野の原の秋風に薄なびきて黒駒
あそぶ

海賊の追ひくと見つる夢さめて湊しづけし有
明の月

後の世の地獄は知らず此世から燃ゆる我胸何
の宿世ぞ

様々に思ひあまりて兄君の一人のほしき秋の
くれかな

よしきりの千聲百聲語れども一人もだせる石
佛かな

咲をゝる櫻が岡の花の雨まどろもどろに人く
づれゆく

川そひの木かげに立ちてそれとなく見送りた
りし人の戀しき

ゆきゆけば朧月夜となりにけり城のひむがし
菜の花の村

幼きは幼きどちのものがたり葡萄のかげに月
かたぶきぬ

一まきり吠えたる犬の聲やみて闇夜さびしき
町はづれかな

いにしへの聖の書をひもとけば窓の竹村清き
風ふく

こゝに來よ安きふしどをあたへむと闇によぶ
らむ梟の聲

形なくかげなき鬼にせめられてやせ細り行く
我身なるらむ

耳うとき隣の嫗今日も来てみやこの孫の物が
たりする

許されぬ罪も許してわが髪に桂の花を折りて
さしゝ君

消かゝる窓の燈火かきたてゝ及ばぬ筆を又も
とるかな

軍よりかへりし子等もまじりけり今年の田植
賑はしきかな

世の中の苦しさをたへぬ時々は人に志られず君
が名を呼ぶ

六部一人志づの男一人馬の上ゆ見ゆるあぜ道
たゞ春の風

木の葉みな枯れたる山のいたゞきに死の太后
打笑み給ふ

長くとも千年へがたき人の世ぞ憂忘れていざ
くまむ君

春深き大江の水に舟うけてうま酒そゝぎ江の
神まつる

妻琴は昔ながらにたてりけり梅ちる窓のおほ
ろ夜の月

いはきの海夕べの嵐雨になりて沖つ汐あひに
雲亂れ飛ぶ

君がためかなでし調きみなくてまた誰が爲に
われハ志らべむ

志いまだ成らずや七年を音づれあらず暹羅に
ゆきし友

たゞにやは鬼とはいはむ幾千度思ひわびての
志わざなるべし

三日月の光一つを光にて武藏野の原の日は暮
れにけり

海驢島あしかへ住まず人といふ恐ろしきもの
にふしどとられて

薫じたる香のけぶりの一筋に思ひ断ちにし此
世にやあらぬ

秋風にふきおくられて明方の並木のかげを我
一人行く

車とめて馬つぎかふる驛路の立場さびしき秋
の雨かな

大寺の丹ぬりのかどの柳かげ燕とび飛ぶ春の
日うらく

ゆきつかれいこふ木かげのかたつぶり汝に家
あり我身はかなき

村はづれうすひく家の日あたりにかたまり咲
けるつはぶきの花

天城山木かげ岩かげ暮れはてゝ大島の邊に稻
妻はしる

咲く梅の花のほひに包まれてたてる奥つき
誰にかあるらむ

いづこにか静けき宿をもとむべき野にも山に
も木枯の風

かしましき亂舞このごろ聲もなし六波羅殿に
物のけ出づとふ

胸狭く思ひせまりしはてくハヤ、ゆるやか
になる心かな

語らひし木かげやいづら古里の道たえくくに
野茨ノハヒはなさく

胸をさく情の斧よ同じくは身をも靈をも断て
よとぞ思ふ

角力はて、人くづれかへる橋の上雪になるべ
き夕暮の風

とこ闇の千尋のやみの底にしも引いれらるゝ
我心かな

人の世に罪なき人の誰かあらむ誰かさだむる
人の子の罪

行けば行きとまればとまる我影のありやなし
やもわきがたの世や

ぬば玉の夜半のさ霧にまぎれ入りてさながら
消えむ此身ともがな

二十年はたとせに一たび鳴りし半鐘のはしご朽ちたり
山かげの村

老の目に涙うかべてのたまひし母の御詞今ぞ
こひしき

後の世の炎の海も渡るべし今此おもひいかに
せましや

春の日の夕べさすがに風ありて芝生にゆらぐ
鞦韆ゆさばりのかげ

秋の日は軒端の竹に傾けど投扇興の興いまだ
つきず

朽ちはてゝ文字もよまれぬ墓なるし子らや貧
しき家や絶たる

うらぶれてひとりさまよふ野のはづれ尾花が
上に秋の富士濃き

とこしへに幼心の失せずしてわれとこしへに
あらむとぞ思ふ

手にとりて喜び見つる風車めぐりやすきは月
日なりけり

少女子の眞白き胸にいつよりかけがれし塵の
おかむとすらむ

薬うる家の板戸をたゞく子の髪ふき亂すさ夜
嵐かな

大空に燃ゆる火の山仰ぎ見つゝ茅萱ちがやわけ行く
阿蘇の裾原

浪くらき磯の松原もやのうちに頬白鳴て夜は
明むとす

前川にあひるおよぎて日まはりの花美しくしき
わらぶきの家

亡き友がいまはの面わゆくりなく枕に見ゆる
秋の夜半かな

默然と僧物いはず禪房のともし火くらし芭蕉
葉のあめ

山かげのこゝにやさしき人あらば我世こゝに
をへむ水の音清し

かにかくにいひ争はじわが心たゞ大空の神ぞ
志らさむ

新嫁のつゝましげなる田植歌たのもすゞしき
朝風ぞふく

さ夜ふけて胸にし問はゞ人の世に罪なき人は
あらじとぞ思ふ

二つなき命をさへもさゝげてき何今さらに君
に誓はむ

下りゆく舟よびとめて賤の女がことづて頼む
川そひの村

新殿の木の香かをりて奥深き木立の奥の木ば
さみの音

君がゆく花の都はよしとても此川そひを忘れ
ますな君

いとせめて手向くる酒の一まづく苔の下にも
とほれとぞ思ふ

うつむきて詞なかりしかの人の姿おぼゆる糸
萩の花

病いえて朝なくの庭あるき日毎色そふ若葉
すゞしき

里遠しいづこより來てつくるらむおく山かけ
の菜畑麥畑

我息の終の息のたえむ時この苦しびは身をや
去るべき

今更にきかむ詞もおもほえずこゝかくながら
君に返さむ

里にいでし法師は未だかへり來ず人なき居間
の水仙の花

底までもすきとほりたる青淵に二ひら三ひら
花ちり浮ぶ

梢みなあらはになりし霜枯の木立にあかき夕
づく日かな

胸にみついくその恨はかなくもわが身と共に
くちかはつらむ

あだ人のほまれの声につゝまれてを琴ひきし
も昔なりけり

旅人のむすぶまづくに濁りてももとの清きに
かへる水かな

神のみ聲きくかとぞ思ふ神路山杉生のおくの
鶯の聲

ゆくへ知らぬ我子此頃いかならむ昨日も今日
も悪しき夢見つ

なまじひに情の言葉たまはるな君はあて人わ
れは海士の子

人しらぬ涙の谷にひとり住みて君がさかえを
祈る人あり

忘れし我は我身を恨みなむ君のいつはり神
は許さじ

我影は川のあなたをあゆみけり浅き流に夕日
よどみて

兎追ひて走せのぼりたる峠道みづらみ青し白
雪の中に

かたづくる夜店商人植木店さよ風さむし片わ
れの月

とりかはすわが手人の手あたゝけきなさけよ
いつかさめはてにけむ

假字がきのわが子のふみを讀みかへし嫗うち
笑む埋火のもと

同じ世に生れあひつる宿世こそ嬉しかりけれ
かなしかりけれ

ますらをのおくつき守る松一木まつ年ふりて
草緑なり

吾妹子の泣きていさめし酒なれどなど此酒の
かくはやめがたき

たま〜にもりくる日かげ命にて木蔭の小草
花さき匂ふ

夕風の誘ふまに〜ちる花をことあり顔に見
る蛙かな

たへかねて散りし木の葉を木枯のいづこまで
とか吹き志をるらむ

重荷負ひて山路をくだるやせ馬の嘶さむし木
がらしの風

山かごに乗りておりくる少女子が手にとりも
たる撫子の花

白帆きえ船唄きえておぼる夜の月にたゞよふ
千島百島

まばし語りて友のかへりし清水がもと又一人
にもなりにける哉

死を急ぐますらたけをの駒のおとに夜霧やぶ
るゝ大川のあたり

ゆふづく日菜の花畑に傾きぬ名古屋の大城遠
く霞みて

吳竹のまき葉にすかく戸たて蜘蛛かくてもあ
ればある世なりけり

とほくゝとさ霧の中をゆく人のかげの見えず
もなりにける哉

吾妹子にはじめてあひし岡のべの其一つ松薪
となりぬ

艸へかれ鳥はうたはず冬枯のかれ野に似たる
我心かな

かくながらかくながら我^{われ}失せぬとも否々我は
いはじとぞ思ふ

人の世に唯ひとりなる君います百人千人敵^{あたい}は
ありとも

馬追がうたふ小唄の甲斐なまり谷間に消えて
雨こほれきぬ

燈火のくらき夜床に獨ありて息あるうちと筆
やとりけむ

年とへば手をひろげても見する哉うつくしき
子よ汝^まが家はいづこ

ざえもなく身も弱くして徒らに畫師になりつ
る身をくゆるかな

鑿^{のみ}の音折々たえて夕日さす佛師が庭の山茶花
のはな

眞心の民住める國一すぢの君います國櫻にほ
ふ國

暮の友は蕨折にといでゆきて出湯の宿の春の
日ながき

うちとけていま一度も語らはゞ恨とけましを
今は世になき

法の師に法の道きゝ馬追に馬の事きく今日の
旅かな

にぎはしきとり入れ祭この秋はさびしくもあ
るか君まさずして

いたづきのおもれる母にかゝる事きかせまつ
らむ事の悲しさ

二度は蝶舞ふ春におとづれむあまりにかなし
みちのくの秋

のどかにも流れゆく水あら海のあらし中にや
入らむとすらむ

千里ゆく心も折れて賤が屋の廐の中に身は老
にけり

ころも川北上川を吹きこえてあきかせさむし
高館の城

かつぎゆく紅梅の衣雪きぬに映はえて卯杖うづの使御門
まかづる

こゝにして老いゆく末を思ひ見ればあまりに
つらき我宿世かな

衰へて賣りたる家の庭の松あの松はとて母の
のたまふ

富士詣かへり來る日と産土の森賑はしき笑ひ
聲かな

見るまゝに眺むるまゝに花もまた物いひたげ
に打ゑまひつゝ

來ませ君わたし渡りて西の村桃にうもるゝ藁
ぶきの家

ぬふ針の一針毎に我おもひこもれりと知らで
君着ますらむ

大和なる二上山のふたゝびはあはじといひし
人の戀しき

船つくる槌の音やみて荒波の聲にくれゆく海
添の里

幸に酒かふ錢のあまれるを今宵の月夜君とあ
かさむ

さらばとてうつぶく妹が一しづくわれも消ゆ
べき心地こそすれ

おそろしき夢よりさめて見まはせば燈火まろ
く雨の音する

旅枕くらきともし火かきたてゝ苦き薬をひと
りのむかな

夕ぐれの村より村をおとづれて遠くきえゆく
入相の鐘

千年なほ流るゝ川の川隈にまばし花さくおも
だかの花

人づての誠しからず思へどもまばしなぐさむ
我心かな

川岸に舟をとめて橋づめの店に酒かふ朧夜
の月

きちがひとりたひはやしてきちがひになりし
こゝろを知る人のなき

いくそたび思ひ返してこりずまに猶とる筆の
命毛きれぬ

草刈のうたふひな唄おもしろし誰より誰に傳
へ來にけむ

吾妹子が織りし衣さぬわがこりし柴ゐるりのもと
は寒くしもあらず

家に送る書かきはてゝ旅やかた雨をながむる
夕まぐれかな

小法師が案内の聲もかれはてゝはるの目低し
きぬがさの山

友を賣り心を賣りてとつぎてもあやのむしろ
や臥し心地よき

おりたちていちごつみとる裏ばたけ朝露なが
ら栗の花ちる

かの人と共に手折りし島かげの秋萩の花いま
さくらむか

のむ酒にうさ忘れしハ志ばしにて又さびしく
もなる心かな

木の芽ふく南おもての日あたりに今日もきて
なく名も知らぬ鳥

近づきし選挙のうはさとりにぐに爐の火赤く
もえて夜はふけにけり

馬なべてゆくゆく語る裾野道右も左もたゞ秋
の花

うとくと火鉢によりて眠ります父の面わの
老ませるかな

松かげの苔なめらかに露おちてあした静けき
鳥の一こゑ

なにごともいはで別れし朧夜やわが世の春の
とぢめなりけむ

樂堂の物のね絶えて人ちりて廣き芝生に蝶一
つ飛ぶ

青淵の深き底ひに我心さそひもてゆく水の音
かな

たまほこの道ゆきぶりにあひし時いかで詞を
かはさゞりけむ

溪に沿ふ五里の山道山の上の雲ひやゝかに雨
こぼれ來ぬ

此秋はあるじなくして刈入れぬ刈の粟生に鶉
なくなり

船一つ南の雲の内に消えて鯨志ほ吹く眞くま
野の海

遠つあふみいなさ細江の秋かぜに月影さむく
あしの花ちる

今日も又ひつぎつくりて暮しけりおのが棺は
誰がつくるらむ

一とせの春のさかりの花かげに酔ひて眠るを
たれかとがむる

悲しき哉わがわざすさみ身は病みていえせぬ
きずぞ胸にのこれる

唯まばし同じ車に乗りあひし昨日の人を思ふ
夜半かな

燭の前に汲むや美酒妻の笑顔みるくかはる
くろがねの窓

いくとせの昔の夢のかげ追ひて一人さまよふ
磯の松原

ゆらくと霧藻ゆらぎて深山木の高きこずる
に駒鳥うたふ

くれぬとてやどり求むる旅人の心にひゞく入
相の鐘

森の王湖さかみの姫訪ふたそがれの道うつくしき白
萩の花

悔ゆれどもくいなげけどもかひぞなきなど愚
なる心なりけむ

否いはじ我悲しびはわがなれば此身と共に土
に埋めむ

歸りくれば君はとつぎぬ花はちりぬ何に歸り
し我身なるらむ

おぼつかな夢かあらぬかおぼる夜の梅ちる庭
に君が聲する

山ふかみ小雨そぼふる小木曾道馬ひくをのこ
唄もりたはず

父の子ぞ母の愛子ぞ御軍に弱き名とるな我國
のため

紅に雪をそめたる丈夫が肌へにそへし老し母
のふみ

いく千々の尊とき血もてあがなひし遼東の山
草の色こき

天つ日の光かしこみいやさきにまつるひより
し高さご嶋山

見そなはせ率分堂に草生ひて大臣うたへり花
の前の宴

八道の山河人なし徒らに鷺の羽かぜに任せは
てむや

起てよ民神のうちますせめ鼓天にとよめり起
てよ國民

亞細亞の地圖色いかならむ百とせの後をし思
へば肌へいよだつ

静なる我夢のせていつしかも我舟はてぬ湖そ
ひの村

紺青の水海赤く日はおちてわれ一人立つ老杉
のもと

水海の岸の木かげにたゞみ静におもふ天
地の歌

日は夕べ水海のほとり山のうへ友ものいはず
我も語らず

湖添うみぞの山下道の七曲り馬にゆられく行くゆ
ふべかな

炭がまの烟一すぢ雲に入りて鳥が音もなし湖
添の山

つばめ一つ果なき空に消え行きて物おともあ
らず水海の上

山をこえ湖をこえ来て湖ぎはにやせ畑つくる
賤の男あはれ

廣き世もこの身一つを入れずして又かへりき
ぬ古里の山

志事とたがひてやせし影うつすもはかな古さ
との水

人觸るれば人を斬らむの劔太刀鞘にをさめて
すでに幾とせ

人の世のねたみあらそひ見おろして山の室屋
にわれ老ん哉

徒らに安きに眠る世なりけり箱に秘めおかむ
わが劔太刀

世人皆われにつれなき世なれども我に友あり
酒といへる友

さかしげにいづこの誰か道を説く酔て歌ひて
我世は過ぎむ

のめや君ますらをさびてのめや君今宵別れば
又いつかあはむ

聲高こゝろたかにかたりあひつる船と船あひだ遠くなり
て日はおちにけり

岸に呼べば船に答へて船に呼べば岸に答ふる
朧夜の月

乗合の人は大方夢に入りて夜船さびしきとも
し火の影

海原を遠くゆきあひし船と船笛の音高く相わ
かれゆく

船人のふな唄遠く遠く消えて人なき入江芦の
花ちる

江の南春あたゝかに梅早しかしこに繫げまれ
人の船

二つ三つ鷗あそびて日は高し沈みし船の帆ば
しらの上に

阿蘭陀おらんたの入舟見えて長崎の浦のゆふ波春まづ
かなり

いざゆかむ葡萄うま酒瓶にみて、吾友待てり
甲斐の山里

八つが嶽山おろしの風寒けれどるりのほと
りとはに春なり

牛かひて庭鳥かひて諸共にわれも住まばや君
が山里

そらほめの聲も聞えずあざけりの聲もきこえ
ず山かげの村

思ひ見れば風雲の望夢に似たり唯打ゑみて我
世すぎさむ

わづらはしあざけり何ぞ譽何ぞ酔て眠りて此
世すぎばや

天地のあるじとなるも何かせむいかでまさら
む此ゑひ心地

ゑひにけりわれゑひにけり真心もこもれる酒
にわれ酔にけり

なつかしき松原見えてなつかしき島山見えて
我船はてぬ

唯一人一人の吾背たよりにて離れ小島に法の
道説く

人志れぬ離れ小島をきりひらき心になふ國
やつくらむ

わた中のかゝる島にも人すみて家もありけり
墓もありけり

島人のつどふまとゐの中に入れて遊子の思そゞ
ろ悲しき

二度は來給ふまじき此島にひとり泣くべき宿
世なるらむ

此島をはなれまうしと君いはゞわれ島人にな
らむとぞ思ふ

なまじひに都のうはさ聞しよりわびしくなり
し鳴ずまひかな

春の水ゆたに流れてゆくらく春の帆つゞく
利根の大川

櫓聲ゆるく歌ごゑ遠し朧夜の月のとま舟佐原
あたりか

君を送る刀根川添の夜の雨あめまめやかに酒
さめやすき

ちのみ子の泣く聲やみて川舟の燈火さむし利
根川の水

おもひ川思ふことなくて渡るとも悲しかるべ
き水の音かな

やみませる夫つまにかはりて此稚子の牛追ふ年に
いつかなるらむ

牛を追ひ牛を追ひつゝこの野べにわが世の半
はや過にけり

牛に似ておのがあゆみの遅くとも行くべき限
ゆかむとぞ思ふ

肉しんちのつばさうごかし尾をうちて山の
大君山川
わたる(虎三首)

雪の夜を旗亭の酒に酔ひまれて張三李四の虎
物語

一人がいふ市に虎あり又曰く市に虎あり恐ろ
しの世や

獅子がしらかつぎて舞ふや老猿の老たる業も
哀なりけり(猿二首)

夕暮のつかれはてたる身ながらもせむ方なげ
に舞ふ小猿かな

やしなふもやしなはるゝも猿曳のいづれか殊
に哀なるべき(狙公二首)

ふところに小猿抱きて猿曳の雨にぬれゆく夕
まぐれかな

國ほろび道たえはてゝくちのこる塔あらかしのうへに
夕日きらめく(題佛陀迦耶塔圖)

湯の中に足さしのべて老人の病も去ばし忘れ
がほなる(鹽原温泉)

ほゝゑみて國傾けしたをやめのおくつき寒し
うぐひすの聲(鹽原高尾塚)

相模峯に將星消えて四百年ますらを江川生ひ
いでし山(葦山懷古)

海を越えて北に國あり何しかも得まくほりせ
し甲斐の黒駒(春日山懷古)

老の身の命のうちにまゐりたく願ひしみ寺見
え初にけり(善光寺四首)

老の身の孫の手からず機おりて得たる黄金を
今日たてまつる

ひれふして祈る姫のいたゞきに金色の佛あら
はれ給ふ

千年へてきえせぬ法の燈火の光いつまで世を
照らすらむ

大門たいもんのいしずゑ苔に埋もれて七堂伽藍たゞ秋
の風（毛越寺懷古）

人かはり時うつろひて既に千年霞める塔よ何
を夢見る（遙望法隆寺）

欄干によりて眠れる順禮の横顔さむくさすゆ
ふ日かな（那古觀音堂）

川くまに流れとまりしわらぶきの屋の上すご
く月さえ渡る（水災後過山北驛）

124

大島をそがひになして行く舟の眞帆吹き送る
山おろしの風（下田囑目）

125

人の世ハわづらひ多しはなれ山ひとりはなれ
て我世すぐさむ（輕井澤望離山）

山高きみ寺のうちにある程は我も志ばしの佛
なりけり（登清澄山）

散るとのみ見てや過ぐらむ墨染の袖に亂るゝ
やま櫻花（贈某禪師）

眞菰なびく十二の橋の夕月夜水ゆるやかに舟
くだりゆく(潮來雜詠六首)

梅雨の今宵の雨に棹さして渡り來まさむ君を
しぞ思ふ

君がためあむや眞菰のあやむしろむしろは成
りぬ君が來まさぬ

江に臨む樓臺三五欄朽ちて歌聲さむし刀根川
の秋

吾背子の船かあらぬか川くまの眞菰がくれに
櫓の音聞ゆ

川添の柳おとろへ芦枯れて去年の宿りに去年
の人なき

五月雨にからかさ借りて本町の朝の市見る旅
のうた人(過新潟市)

火祭の松の火空にきらめきて人去げき道にほ
のみてし人(觀吉田火祭、甲斐)

天地は雲にうもれて我影の外に物なし岩の上
の道（以下二十八首富士登山作、途上二首）

ゆきあひし白衣の群は影消えぬ白雲のうちに
鈴のおとして

敗られしさたんの軍ちりみだれくづるゝが如
雲走り行く（望雲海四首）

北の海の千尋高波見るくも氷れる如き雲の
海はや

筑波嶺の神のみ使いたるらしひむがしの空ゆ
雲舞ひ來る

いく千人幾よるづ人一ひらの此白雲の下に住
むらむ

天地に物音もあらず月一つ空にかゝれり富士
の嶺の上（山上覽月二首）

見るまゝに清く静けくうるはしく果は悲しき
峯の上の月

息こもり人げこもりて岩室のうちほのくらし
ともし火の影(宿巖室八首)

酒さめて話もつきて岩室の室の外とすぎき夜あ
らしの聲

岩室を夜半に立いでて見さくれば人の世くら
く雲立ちわたる

聲高こたかに物は語らじほど近き星の宮人ねぶりさ
むべし

天近き室の岩床夜をさむみ人の世戀し人の身
われは

うつらく夢成りがたみ見まはせば燈火くら
し岩室の内

富士のねの石の室屋の岩枕ゆめ白くもの上に
たゞよふ

所せき石の室屋の雨ごもり爐の火いぶりて話
とだえぬ

いつよりか天の浮橋中絶て人と神との遠ざかりけむ(山頂七首)

神山の此いたゞきにうづみおく歌の一まき神ぞまもらむ

いつの世に作らしましていつの世に碎きますべき此世なるらむ

たゞよへる麓の雲の底にありて何をか競ひ何をか争そふ

俯して見る大やしま國あまりにも小さくもあるか大やしま國

我大君龍のみ馬に鞭うたし國見しまさな神山の上に

身も清く心清くて山の上の我身そゞろに神かとぞ思ふ

根の國の底つ岩根につゞくらむ高ねの眞洞底
ひ知られぬ(噴火古坑三首)

もゆる火のもえたつ上に天きらひみ雪ふりけ
む神代をぞ思ふ

神山は更に火噴かむ東の洋あれに荒れなむ百
年の後

神の代に天降りけむ天人のくましゝ水か白金
の水(銀明水二首)

白玉の甕もたひに盛りて大君にさゝげまつらむ白金
の水

壁おちぬ家へくづれぬ志かへあれどわれに寶
ありかゝる笛あり(詠笛連作十二首)

せめはたる人さへ今は來ずなりぬわが笛一つ
われにのこりて

山の端に月へのほりぬわが笛を今こそ吹かめ
月へのほりぬ

花かげに袖うちたれてきゝし人いづちい
にけむ笛へあれども

童べよこち来て聞けやわが笛を何をか笑ふわ
れやをかしき

ことならば嵐も吹けや雨もふれたゞこの笛を
われはすさばむ

われは唯ひとりぞ吹かむわれ知らぬ人にきか
せむわが笛にあらず

雷かみもおちよかみもいでよわが笛をいかなるもの
か敢てとゞめむ

我身をも世をも忘れて吹く笛のすみゆくまゝ
にすむ心かな

笛の音はすみこそほれかくながらのほりや
すらむ天つみ空に

笛の音はいづこそ誰ぞなつかしき聲こそひゞ
け雲のはたてに

身もあらずあたりもわかずうるはしくたへな
る調四方にみちつゝ

ふしながら見まし、去年の花うばら今年も咲
きぬ折りて手向けむ(先考一週年祭)

夏の夜の月影涼し父母のいます方にもかくや
照るらむ(考妣全祭日)

天にいます我父のみひきこしめさむ我うたふ
歌まらべひくゝとも(先考十週年祭)

一まきの書たづさへて筆のせてひとりわが行
く唐土の秋(將遊清國)

余欲遊清國因輯平素所賦先爲一集
事出倉卒駁雜頗甚他日將續出二集
三集乞教大方

明治三十六年十月 佐々木信綱識

奈麻余美乃甲斐乃國打緣流駿河能國與已知其智
乃國之三中從出立有不盡能高嶺者天雲毛伊去波
伐加利飛鳥母翔毛不上燎火乎雪以滅落雪乎火用
消通都言不得名不知靈母座神香聞石花海跡名付
而有毛彼山之堤有海曾不盡河跡人之渡毛其山之
水乃當知鳥日本之山跡國乃鎮十方座神可開寶十
方成有山可開駿河有不盡能高峯者雖見不飽香聞

明治三十六年十月廿七日印刷
明治三十六年十月三十日發行

定價金五拾錢

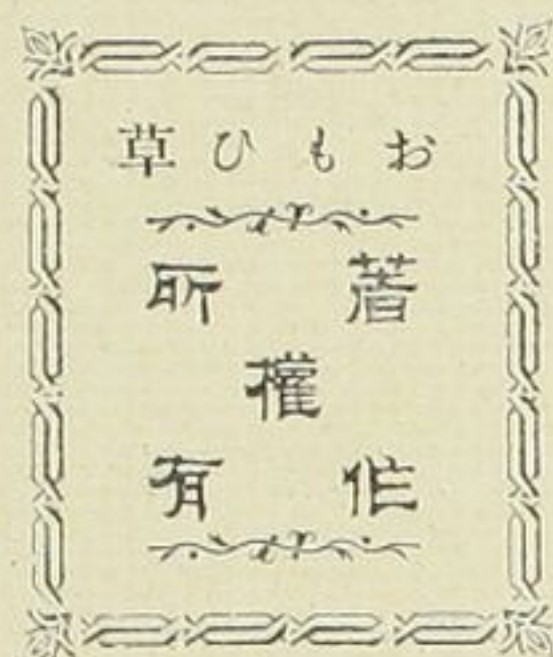
著者 佐々木信綱



發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 石川金太郎
東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

印刷所 株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町二十六七番地



發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

1347

10

竹柏園編纂書目

日本歌學全書	十二卷
續日本歌學全書	十二卷
增補歌之葉	一卷
竹柏園集第一編	一卷
竹柏園集第二編	一卷
日本歌選	一卷
日本歌學史	二卷

